

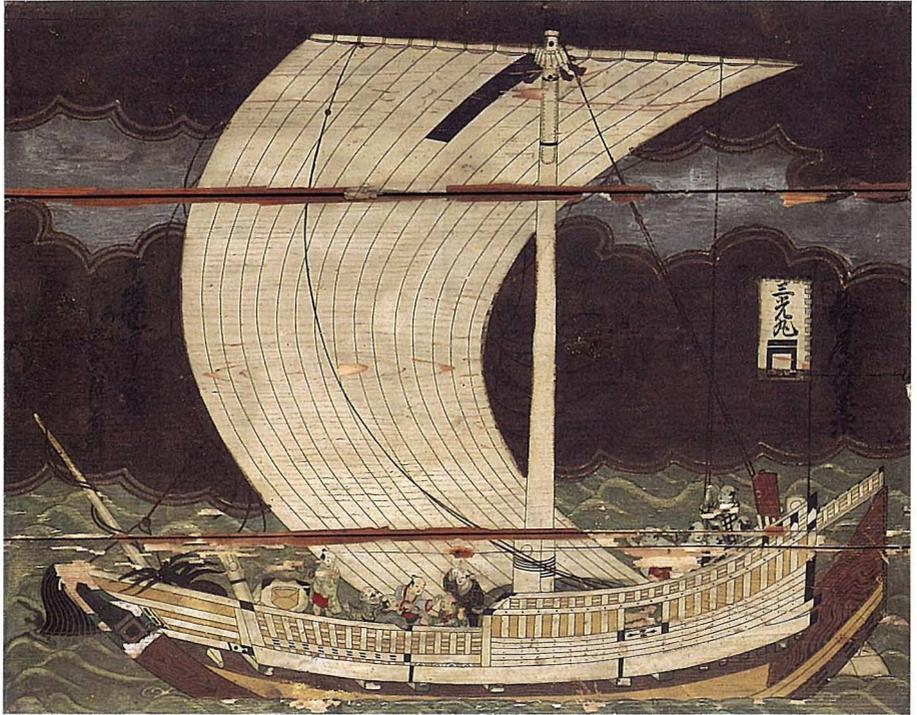
新修
神戸市史

歴史編Ⅲ

近世



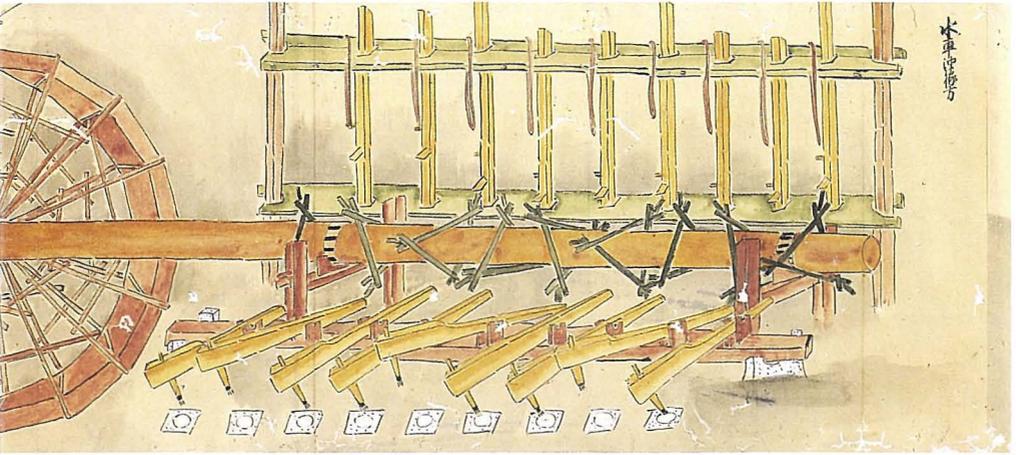
1 海路図屏風



2 延享3年奉納船絵馬

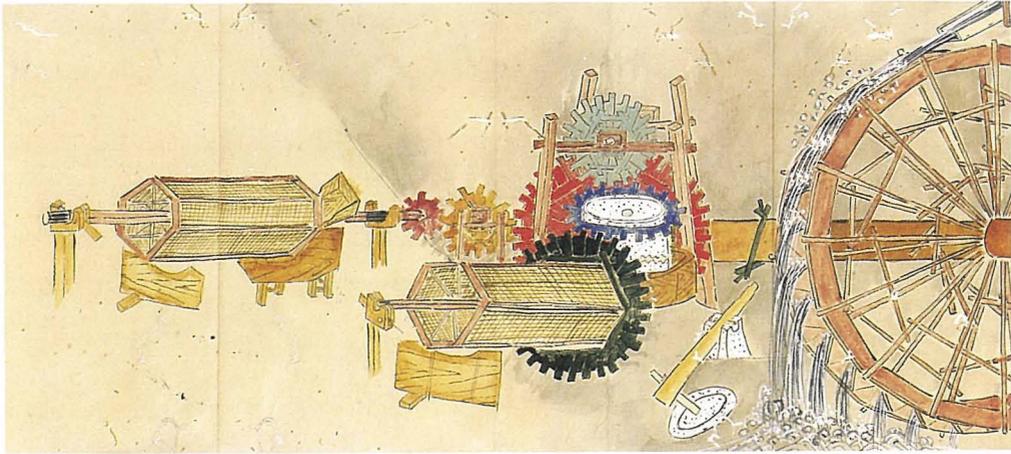


3 兵庫津に上陸する朝鮮使節 宝暦14年



抽子かきまゝに二万うん
 つまひのちまひのち
 ひとまゝあゝあゝあゝ
 こゝろしゝまゝあゝあゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 二人ぬんぬんぬんぬん
 又まゝまゝまゝまゝ
 抽子かきまゝに二万うん
 つまひのちまひのち
 ひとまゝあゝあゝあゝ
 こゝろしゝまゝあゝあゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 二人ぬんぬんぬんぬん
 又まゝまゝまゝまゝ

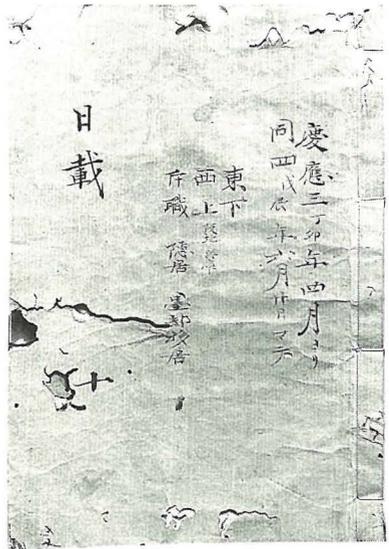
抽子かきまゝに二万うん
 つまひのちまひのち
 ひとまゝあゝあゝあゝ
 こゝろしゝまゝあゝあゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 二人ぬんぬんぬんぬん
 又まゝまゝまゝまゝ
 抽子かきまゝに二万うん
 つまひのちまひのち
 ひとまゝあゝあゝあゝ
 こゝろしゝまゝあゝあゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 二人ぬんぬんぬんぬん
 又まゝまゝまゝまゝ



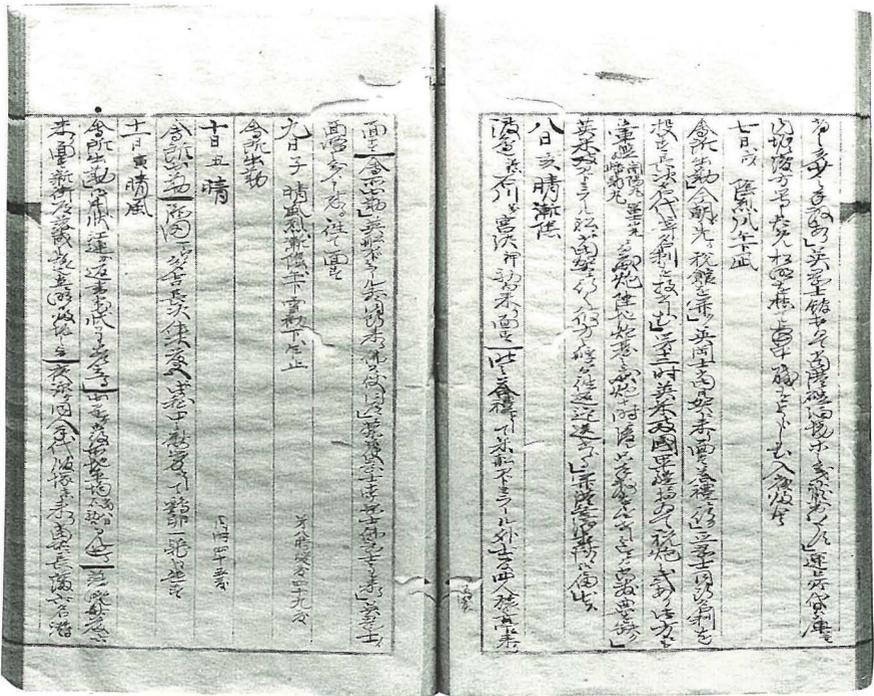
4 絞油水車器械の図

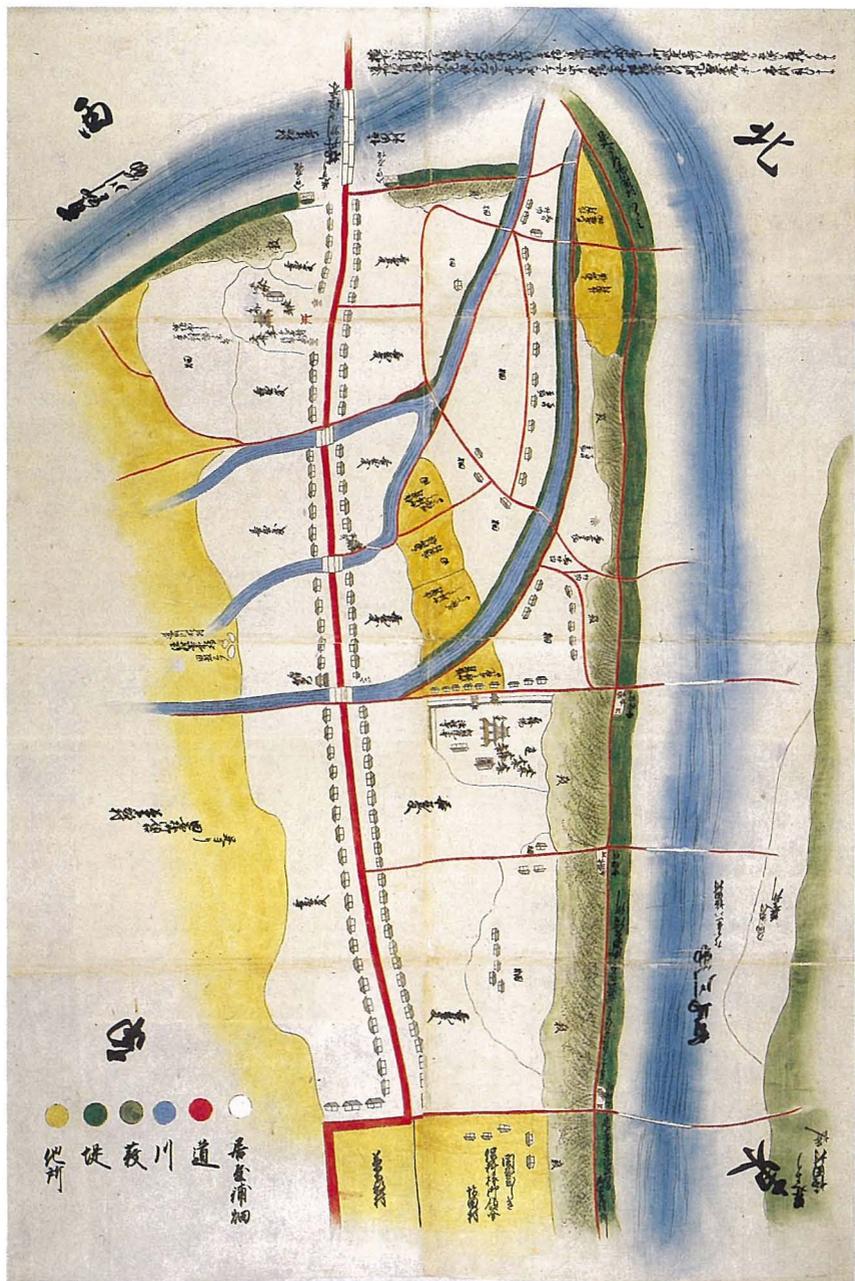
上の下ろす左の歯
 もあつた。何は
 左の合はる人
 左で作らるる
 了云しは油と
 いかに油はる
 も油さうらう
 あしくすは油
 出の下、ため
 凡たつてか

上の下ろす左の歯
 もあつた。何は
 左の合はる人
 左で作らるる
 了云しは油と
 いかに油はる
 も油さうらう
 あしくすは油
 出の下、ため
 凡たつてか



6 柴田剛中「日載」 慶應3年12月





7 道場川原村絵図



8 農村歌舞伎舞台 北僧尾巖島神社長床

凡 例

一、『新修神戸市史』歴史編は、「自然」「考古」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」からなるが、この巻は第三巻として「近世」を収める。

一、この巻の執筆分担者は、巻末に一覧表で示した。

一、本文の叙述は原則として、常用漢字、現代かなづかいを用いた。ただし、歴史的用語、固有名詞、引用文などについては、必ずしもこの原則によっていない。

一、本文の叙述は、諸氏の研究成果に依拠しているが、本書の性格上、いちいち出典を示さず巻末に参考文献の一覧を掲げた。ただ、史料などを直接的に引用した場合（原則として読み下し文に改めた）は本文中に出典を記載した。

一、人名の敬称はすべて省略した。

一、難訓または誤読のおそれのある漢字は、各章の初出のところで、ふりがなを付した。神戸市内の地名の読みは、基本的には神戸市総務局政課編『神戸市町名一覧表』（平成三年）によった。

一、文中の写真、図、表は、それぞれ通し番号を付した。これらの掲載と提供に協力していた
だいた関係機関、団体ならびに諸氏の名称は、原則として巻末に掲げた。

一、史料提供・協力者の一覧は巻末に掲げた。

一、本文中の年月日は原則として当時の日本暦によっており、ただ参考までにその年には相
当する西暦年を（ ）内に記した。

一、度量衡については、史料に則して尺貫法で記されているが、巻末にその換算表を付した。

一、本文および引用されている史料のなかには、身分や職業に関して、当時の差別的名称で記
されている部分があるが、差別的歴史を科学的に研究する立場から、本書ではそのまま掲載
した。

題字 前神戸市長 宮崎辰雄

新修神戸市史 歴史編Ⅲ 近世

目次

第一章 近世の開幕

第一節 織田信長の摂津・播磨の平定……………二

1 信長の摂津進攻……………二

信長入京の年の状況 兵庫の町と海岸寄りの農村 室町幕府の滅亡

2 荒木村重の反抗と花熊城……………八

荒木村重の台頭 一向一揆の花熊籠城 百姓遷住と信長の検地

第二節 豊臣秀吉の全国統一……………一七

1 秀吉の覇権確立……………一七

秀吉の大坂築城 関白秀吉の有馬茶会 兵庫津の正直屋宗与 湯山街道と淡河

町 秀吉の湯山支配

目次 2 文禄・慶長のころ……………二九

大陸侵略への準備 文禄三、四年の太閤検地 藍那村の文禄検地 藍那村の農民構成 慶長の大地震 関ヶ原戦後の支配状況 豊臣氏治下の兵庫津 豊臣から徳川へ

第二章 近世社会の成立

第一節 幕府と諸藩

1 国絵図・郷帳と所領配置……………五〇

慶長の国絵図 大坂陣後の所領配置 元禄国絵図と郷帳

2 幕藩支配の諸相……………六一

慶長期の国奉行 寛永期の幕領支配 藩領・旗本領の支配 近世の身分制度

3 検地と年貢……………七〇

池田・有馬の慶長検地 尼崎藩の年貢 幕府領の年貢 延宝検地

第二節 兵庫津

1 近世前期の兵庫津……………六六

兵庫津の景観 慶長期の職業構成 戸田氏の支配 青山氏の支配 貞享二年の兵庫津条目 災害と対策 兵庫津の市制

2 近世前期の商業……………七二

3	兵庫町民の構成	兵庫津の風俗と文芸	二二三					
	浜本陣の成立	問屋・仲買の發展	仲間の成立					
第三節 郷庄と村								
1	郷庄と村切り	西撰三郡の村々	明石・美濃両郡の村々	二二八				
2	村社会の様相	板宿村の村民構成	下人の存在形態	村の機構	村民の生業	皮多村の成立	二三五	
3	水利と山野	溜池と井堰	水利慣行をめぐって	明石郡の掘割開削	中一里山争論	和田山争論	撰播国境入会山争論	二三八
第四節 前期の諸産業								
1	近世前期の農業	村々の農業生産	板宿村の農業経営	坂本村の農業経営	二五二			
2	近世漁業の成立	網漁法の確立と漁場	兵庫公事網一件と撰播国境漁場争論	西須磨浜の他国網分一銀	漁業者と漁期	漁業税の新設	二五九	

3 近世酒造業の成立……………一六六

近世酒造業と酒造技術 下り酒銘醸地の形成 酒造株制度の実施 株改めと酒造統制 兵庫津・灘目の酒造家……………

4 版本に見える市域の特産品……………一八〇

『毛吹草』に見える市域の特産品 有馬温泉の人形筆と竹細工 『摂陽群談』に見える産物 『撰津志』に見える産物 『日本山海名物図会』に見える産物 『日本山海名産図会』に見える産物 『撰津名所図会』に見える産業……………

第五節 交通と宿場……………一九〇

1 交通路の拡充と宿駅制……………一九〇

西国街道と地方道 宿駅制の確立 奥畑・妙法寺両村の通行争論……………

2 湯山と淡河……………二〇一

有馬氏と湯山 幕府直轄領となった湯山町 温泉の繁盛 馬借町としての湯山町 文人の有馬温泉入湯記 有馬温泉の歴史・地誌類 湯山町の寺社 淡河町の支配 明石藩領となった淡河町 淡河組大庄屋村上氏……………

3 近世海運の展開……………二〇三

近世海運の始まり 西廻り海運の開発と意義 上方・江戸間海運と菱垣廻船 大坂・伝法酒積問屋と樽廻船 小早と樽廻船 兵庫津の江戸積問屋の成立 日本海へ進出する脇浜・神戸・二ツ茶屋浦の船持……………

第三章 近世社会の展開

第一節 幕政と藩政の展開

1	享保の改革	行政機構と法制の整備	『五畿内志』の編集	西撰での並河誠所	三三六			
2	明和の告知	大和小泉藩領の告知	明和六年神戸村日記	告知後の代官行政	幕府年貢策の展開	長崎奉行石谷清昌と告知	植崎九八郎封事の限界	三三七
3	藩政の展開	尼崎藩主の交替	領主交替の波紋	尼崎藩治下の神戸村日記	藩主の巡見奉行の廻村	貢租米徴収と売却	明石藩政と中村御用覚帳	三三八
4	旗本支配の構造	旗本宮崎氏	地頭役人のいない村	殿様の御意	江戸への送金システム	旗本の家計	公儀との関係	三六八

第二節 兵庫津と商業

1	尼崎藩治下の兵庫津	松平氏の支配	兵庫津商業の展開	市中の発展と階層差の進展	兵庫町人の新田開発	三六〇
---	-----------	--------	----------	--------------	-----------	-----

2	幕府支配下の兵庫津	三九一
	幕府の兵庫津支配 租税の変化	
3	兵庫津商業の展開	三九七
	株仲間成立 北風家の台頭 天明七年の打ちこわし	
第三節 村落社会の動向		
1	村落構造の変動	三〇五
	板宿村での村方争論の発端 争論の背景となった井手料米 明和期白川村の座席争論	
2	村落社会の展開	三二二
	国訴のはじまり 「明和の仕法」後の菜種訴訟 村を巡る人々	
第四節 農業と在方産業の展開		
1	市域農業の様相	三三一
	北部諸村の米作農業 六甲南麓村々の綿・菜種作 西部諸村の米とタバコ作	
2	栽培技術の進歩	三三六
	新農具の普及 干鰯・しめ粕の使用 多様な稲の品種と播種量	
3	社会的分業の進展	三三三
	農間余業の展開 村の職人・商人 御影村・脇浜村の職業分化	

	4	水車業の勃興	三六
		西撰における水車業の萌芽	
		水車新田の開発	
		水車新田における絞油業の隆盛	
		寛保三年令と水車新田村の江戸訴願	
		明和七年の油仕法の改正	
		油水車と米搗き水車	
		第五節 酒造業の展開	三四七
	1	幕府酒造政策の転換	三四七
		酒造制限から勝手造りへ	
		元禄江戸積体制の動揺	
		享保九年の下り酒銘醸地	
	2	灘酒造業の台頭	三五一
		灘目と灘五郷	
		灘御影村の状況	
		御影・魚崎村の酒造業	
		酒造関連産業の広がり	
	3	江戸積撰泉十二郷の形成	三五九
		灘目の台頭と大坂・西宮・兵庫の衰退	
		天明期の江戸入津樽数	
		天明期の御影村	
		酒造業	
		江戸積撰泉十二郷の形成	
		撰泉十二郷結成の契機と時期	
		第六節 近世中期の海運と浦船	三七〇
	1	菱垣廻船・樽廻船と積荷協定	三七〇
		江戸十組問屋の成立と菱垣廻船	
		享保期における商品輸送	
		酒店組の十組脱退と樽廻船	
		海運競争と積荷協定	
	2	西宮浦積所の特権と灘筋廻船	三八〇

第七節

交通・通信網の展開

- 1 外国使節の通行……………四〇七
 - 2 オランダ商館長一行の兵庫寄港 朝鮮使節の通行 宝曆十四年の朝鮮使節
交通量の増大と宿駅制の矛盾……………四一四
 - 3 荷付牛馬口銭の発端 六甲横越え荷物運送 兵庫駅への助郷村付属
飛脚問屋の活動……………四二三
 - 4 飛脚問屋の灘直届け 村に届いた飛脚便 油方米方早飛脚の通信網
有馬温泉と湯山町の動向……………四二九
 - 5 町年寄の町政運営 町入用銀出入一件 湯山町の窮状 有馬温泉の入初式
有馬温泉関係の版本類
名所記の出版……………四三六
- 『福原鬘鏡』と『兵庫名所記』 『撰津名所図会』と『播磨名所巡覧図会』 庶民

第四章 近世社会の変容

第一節 幕政と藩政の改革……………四四八

1 寛政から天保へ……………四四八

寛政の改革 改革の基調と代官爾正 天明巡見使の派遣 寛政改革と大坂代官

代官竹垣直温の改革

2 天保の飢饉と改革……………四五一

天保の飢饉 飢饉の深い爪跡 天保の御料所改革 御料所改革の中止

3 藩財政の窮乏と藩札仕法……………四六七

尼崎藩財政の窮乏 藩札の流通と通用停止 明石藩札の流通 幕末における私
札通用

第二節 近世後期の兵庫津……………四七六

1 兵庫津商業の展開……………四七六

寛政の改革と兵庫津商業 北前船の経営 高田屋嘉兵衛と幕府の蝦夷地政策

豪商の形成 浜本陣の不振

2 天保の飢饉と幕政改革……………四八八

3	灘目両組の油生産高と出荷先	天保三年の油方仕法の改正	五四九
3	鉦山の開発		五四九
	有馬温泉の泉源と周辺の鉦山開発	長谷銅山の開坑	長谷銅山の稼行状況
4	漁業の変容		五五五
	兵庫の魚市と生け洲	兵庫他国行漁船の発端	灘目浜の請負地曳網
	山田村の献上鱈		明石藩領
第五節 酒造業の発展 ……………五六一			
1	寛政改革と酒造統制		五六一
	天明八年の株改めと永々株	一紙送り状改印制と下り酒十一ヶ国制	改革期における江戸入津樽数
	積買入株と酒造冥加金		
2	化政期灘酒造業の飛躍的発展		五七〇
	寛政末期の灘酒造業	自由競争期の江戸入津樽数	入津樽の増大とその対応
	積留・積控・減造の申合せ	文政九年の吹田屋事件	文政十一年の上灘郷の分裂
3	天保三年の新規株交付と天保改革		五八一
	辰年御免株の新規株交付	新規株をめぐる灘三郷とほか九郷	株割による十二郷の調整
	灘目四組の請株状況	内部対立の激化と幕府の対応	天保改革と酒造株の改称
4	灘酒造業発展の技術的要因		五九五
	酒造技術と仕込工程	米搗き水車の利用	寒造りへの集中化
			酒造仕込方法の

改善	醸造技術の改善	酒造蔵の拡充と千石蔵の定型	酒造働き人と労働編成
蔵人の給源地と丹波杜氏	蔵人の賃銀と支払方法	蔵人の雇用方法と杜氏集団	
酒造経営と経営収支	酒造経営と設備投資	生産費目と流動資本	流動資本の投入状況
	入と選択	灘目米仲買による出買直買	酒造経営と酒造勘定帳
	店卸帳と資産内容	酒造資本の回転期間と貸付資本	総勘定帳と経営収支
	灘酒の販売機構と江戸下り酒問屋		

6	灘酒の販売機構と江戸下り酒問屋	六四五
---	-----------------	-----

江戸酒問屋の成立	江戸十組問屋の結成と酒店組	下り酒問屋と住吉講	送り
荷仕法と仕切仕法	荷主対問屋の対立	調売附仕法と融通受仕法	下り酒問屋
株の公認と浦積	灘酒の販路と銘柄		

第六節	近世後期の海運	六四八
-----	---------	-----

1	菱垣廻船と樽廻船の海運競争	六四八
---	---------------	-----

砂糖の澁積と杉本茂十郎の裁定	菱垣廻船積仲間	結成	文化期の上方・江戸間
海難状況	大岡藤二の樽廻船新造計画	紀伊三カ浦廻船と樽廻船	紀州廻船の
菱垣廻船への加入	天保四年の両積規定		

2	日本海海運と兵庫津	六六〇
---	-----------	-----

北前船の定義	石見浜田の客船帳にみる兵庫廻船	高田屋嘉兵衛と兵庫・箱館
北風荘右衛門と北前船	江差岸田家と兵庫北風家	内海船と車屋五兵衛

第七節	農村の生活と文化	六七
-----	----------	----

1	農村生活と年中行事	六七八
	白川村歳時記 伊勢講と伊勢参り	
2	祭礼の伝統と農村舞台	六八四
	祭礼の伝統 明石郡に多い能舞台 北区の浄瑠璃舞台	
3	庶民文化の諸相	六九三
	庄屋の蔵書目録 家長の残した処世訓 俳諧・和歌の仲間	
4	生活習俗と家	六九九
	冠婚葬祭 暦と度量衡 家と人別送り 村役人と家格 村のなかの家	
第五章 幕末の社会		
第一節 幕末期の兵庫		
1	幕末期の兵庫津商業	七〇〇
	株仲間再興令 箱館産物会所	
2	物価の騰貴と打ちこわし	七〇五
	困窮人の救済 慶応二年のコボチ 賃銀値上げ運動	
3	幕末の兵庫情勢	七一九
	御用金の賦課 兵庫町人の負担の増加 ロシア軍艦の来航と摂海防衛 台場の建設 幕長の対立と兵庫 居留地の造成と柴田剛中 おかげ踊りの乱舞	

第二節 村落社会の趨勢……………七三

1 幕末における村々の動向……………七三

安政の綿国訴と西撰の村々 慶応元年の菜種国訴 地域管理する村々 地域社
会に働く人々 防長戦争と村々

2 近世後期の人口動態……………七四

村の人口と人口支持力 各村の人口変動 世帯規模の縮小化 年齢別人口構成
の三タイプ

第三節 幕末期の農業と鉱工業……………七五

1 農民の階層構成と地主小作関係……………七六

南部諸村の階層構成 北部諸村の階層構成 幕末期の地主・小作関係

2 近世後期の諸産業と仲間組織……………七六

樽屋職仲間の結成 十二郷酒樽屋仲間 紀州藩専売制の影響 魚崎村の素麵業
素麵屋仲間の取決め 魚崎村の焼酎屋職 魚崎村のその他の諸職 水車業の転
換 市域内の水車の分布

3 高取山周辺の炭坑開発……………七六

車村・奥妙法寺村の炭坑開発 石炭山の支配 出炭状況 兵庫奉行柴田剛中の
炭坑開発 シドニー・ローコットの報告 幕府崩壊後の炭坑試掘

第四節 幕末期の酒造業……………七八

1 灘酒造業の集中化 六九

江戸入津樽数の変遷 灘目・伊丹の後退と今津・西宮の進出 江戸入津樽数から
みた灘目の変化 酒造株高からみた集中化と没落 幕末期の御影酒造業 幕末
期の魚崎村酒造業

2 摂泉十二郷の解体と江戸下り酒問屋 八〇三

幕末期の十二郷酒造仲間 万延二年の酒造年寄役新設要求 入津冥加金と問屋口
銭の引上げ

第五節 幕末期の海運 八〇八

1 幕末期の上方・江戸間海運 八〇八

株仲間の停止と九店仲間の結成 九店仲間と九店差配廻船 九店差配廻船の稼働
状況 株仲間再興と樽廻船 幕末期の樽廻船 樽廻船の発展と海上輸送力
兵庫津の江戸積問屋株取立て申請

2 樽廻船経営の実態 八二四

買積船と賃積船 賃積船と廻船加入 廻船加入の二類型 樽廻船経営と帳簿組
織 本嘉納家の持船と船頭・水主 亀徳丸の新造・作事と稼働状況 樽廻船亀
徳丸の廻船経営

3 海上交通の諸相 八二四

神戸村浜の船たて場新設 遭難と漂流 御影村嘉納屋歡喜丸の漂流 大石村松
屋栄力丸の漂流

第六節 陸上交通の変貌……………八四八

1 宿駅制の破綻……………八四八

文政年間の兵庫助郷村争論 六甲横越え貨運送業の実現 湯山―灘新道貨運送の
差止め……………

2 湯山町の復興……………八五三

湯山町の町政刷新 湯山町の窮状 湯山町の人口 町役人の不正を訴う

湯屋の申合せ 有馬温泉の効能 湯治の様相……………

3 幕末の海陸交通……………八六六

蒸気船の入港増加 海陸交通の接点としての兵庫津 徳川道の開削……………

第七節 幕末から維新へ……………八七四

1 外庄への対応……………八七四

ペリー来航 老中阿部の対策 和親条約の締結 ハリスの来日と通商条約の締
結 將軍継嗣問題と条約勅許申請 井伊の大老就任と条約調印……………

2 攘夷運動と対外問題……………八八六

久世・安藤政権と兵庫開港の延期 航海遠略策の提起 島津久光の幕政改革
破約攘夷論への転換 將軍上洛と摂海防衛問題 神戸海軍操練所の創設 八月
十八日の政変 参与会議とその解体 破約攘夷論の破綻……………

3 幕府の倒壊と兵庫開港……………八九一

〔卷末付録〕

幕権強化の動きと第一次征長 将軍進発 条約勅許 薩長盟約と第二次征長
徳川慶喜政権の成立 兵庫開港の勅許 兵庫商社と貿易構想 兵庫(神戸)開
港の準備 大政奉還と国家構想 最後の激突

執筆者一覧

編集協力者

写真・図(付図)・表(附表)一覧

参考文献目録

付図

単位換算表

附表